撰集抄

撰集抄第二目録

一 攝州山居僧頌書付事
二 遁世上人事
三 見佛上人事
四 都多僧奉事
五 攝州竹黒居士尼公事
六 親鸞聖人往生事
七 三井寺学徒法滅尼授菩提事
八 寶日上人事
九 瞻西聖人事

文庫

撰集抄巻二

一 播磨別山居僧願書往生事

播磨ゝ国と聞ゝしるんめり。ねがはしき事なりとぞ思ふ。人もかよはぬ山の中にぞ住する人の侍りしが、て入侍りしかば、山中とはいへども、むかしゝ栄華をいとなみしかの谷合。

[illegible]

[illegible]

の事ども[illegible]

[illegible]

死まさに死ぬべきを聞きて本来寂滅也
と書きうつと詠り侍りけれど、墓堂の人聞きもてみる
事もなくてやがて侍りしと侍りしかば、
いまそうりゐん、過ぐる頃まで侍り。若の源の頼朝
て、宗の右兵衛佐義朝の男なり。強盗ふるまひす。強盗ふるまひの法
より侍りけるとすると。唐の国にも非ざるべし。
極悪人なるべし。幸強なるふるまひして何とて寿命
分とぞ侍りけるとぞ。いとゆゆしきことなり。
侍りけ。死をば死なるべしとぞ。
ざりけんの中にも、なくずくなりけるとぞ。
の産強なるべし。世の者ども。雑なるべし。なほ云人

侍りけれかるべしとぞ。さは侍りけるとぞ。
のうまひ人の積りて仰てぞ。そうりの事なり
と。侍りて実侍りけ。産強の積ハ、中く尚時を法よ
侍りけんと侍りて侍りけ。
砌より。行を持ざりけ。
侍りけ。世代遍くく人の産。ちるべくふ侍りけ海の
ひとり。海山のもまひ。ふ海山くも侍りけ。
持尚てハ分一人すると。産のとりがさふ獨て居
の山のすまひをかるひとくして世ふるべし。
詮をたぐ法分と懸ひ顔ひのぞるべきふ
侍りけなるべくの法分とひ

源く思ふ様さで侍る。抑なほ来富静なりとは何の富静ぞや其事を去るとは何物とを指侍りけん。

二 逆西上人の事

一法侍る大納言如道卿。高山寺の住侍る法師の
くらの者。ちかぬ法師の事をば慢の文侍りけ
いにまれで大納言ゆめ編ていく思ふ事はかの法師
い僧乃下ふ事を侍る人々れ侍りて見ますの侍し
侍りけんと云ふやはんん。但さてもあまりてを慢
この言侍る侍りまり。法猿くいるでくて方につ
あて正まて侍りそれ。を俺の人耐て慢とぞ者者
みあるべき縁をなりけりさ為乃なつるるく。

反ふもいるべく。系慢さ拾なのべられなてきう
拾こそ。さやうふわる人侍へで。三るい慢ふ絶しん
やはれと。後ふん絶なくうるひるりがくすう事るび
くふるり侍るいん人あやるて女るぞ侍るこひるすう
るいいを侍る。りたるずふを尺てさありるで。煩し
きまて法侍し合侍りる。大納言は事とりまて変侍く。
ふさう絶なすぞ侍るまうするているくいは侍るくなし
つくぞは変はいるかべ。笑るるすし。絶くい師合あ
侍るあれぞは僧を長て元侍りるる。を後人自と
侍て尺侍るぞは僧陰と何て門るふざ西へ主乃
ぞ尺るかるまふ尺侍りるれぞ。法勝寺乃名よ。球ふ

くうつの心げなる心食よぶきものの法ぬぎすてて我方
いとゝ合なる掘ゞりきて。海りありぬ。ぬ人あるを也つ
人目をもづゝかゝの心驚て。急ぎ大納言よびよせ法文
くへてゝりぬる後いよいよ人ゝそゝて。日法すゝも仏
ど。度も重くなれば。合をしてすゝめ。夕れば世に
をゝいなく思ふ。ものゝ。二ゝるありて。ゝ法ものゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

うぶすまびんぼうほどこされ侍りける。海山の幸ひはあるべし
やとそこらと打ちへどいの為ふ身はさすがなんこぶやのまこと
てあんいをそ思へどかくこそ侍るべ。後世人々幸ひ心の細
言の葉にて。食業和尊集の舞集の歌を侍りて。
中くにをかくこそ及侍らずやうくやうくすぐ海
ゆくてそ見し侍るべ為頼のこと本にとるく海ろくいまを
うりあんいくらしく身よりてそ　ぞ侍るあふ雨
ふ菓子れで生とこまを海抱ぶりあんまれまをて思故
屋にをのまいあるぶりあんより。我おを面百よ却八雨多
歟とまれて我八面侍おるるんをする山田ちる去寛僧
坊のひさ於りる勢る封雀りてを侍りんとのの抱侍

ふなりうこ侍るりてぐいとは侍らぐ多。り田れ重よいぶ
紅ふ諸屋とーてへあ海乃ゆ方おを海りあん。
奥となりていくまびうん人の味とを面ーきん踊と
まていわりれをあひて九条八重よいるくさ。本と歌
くいられ世の車とかりて。欲き行まる時をおなる
ん。さて八後らをまるの抱よいのず。皆ひとくく
八侍奥ーー侍く。見又ちうくなるくく踊て思侍
部ーー。八侍ちー。我風りあ侍ると幡ーーんるりさ
をたのしぶり恩潤源きまを志。歌い義会とるらぶ
き。父母まてをありあんぢうあれをるまてこまようて
くるれんいくくくを海乃我本おくを侍るくあり

かゝる人とそゞむ事はさすがに畜生と表しぬべきなり
法の師歟迦大師の法息絶やうなく邪淫をのゝしなるべ
し。さまざまの事ありてやうやう年やうん皆人乃ぶ
理なれば知るべしぶうは思ひぬぞうよ。乞食の仏
なほ世のうらぶきに人とそむいて心を尋ねて実の
法を思ひ蓄くはうそしらぬ。悪のみ適る人男り生
きはの間いとふ事を勤ハ抱まさてしもそれさて思せれ
ふ事ハ世く流乃業ときたし。ぶく集て。
昔乃ふ戒十善の程と形来なるうそしてぬる事
とくひてを甲斐なし。真しらひさちり花罪し業
乃ごとくみして。無日ハ見と来ふと事ハ

無日しいの別れ水むべしうす。我心見なり。無日い
のちるぶくなるふあうぶ。ぶぶ道念の一門ぶりぶれで
道心と義さぶ。ぶ始しぶりぶ集ぶ罪乃。さなぶ
皆滅ぶ。ぶ有難位の月と。胸乃中ふす西さん事。
ぶいぶさぶあぶ。ぶ乃月をむるべ。ぶ波ぶ
皆ぶなる。西ぶて位ぶ。さて追西ト人ぶつ
乃ふ長ぶるして。ぶぬと取ぶへ選ぶて。ぶ
ふぶて。ぶぶ中ぶ方なく。ぶぶ。ぶふ
ぶ事ぶる。ぶ乃書ぶ今ふ書ぶる。ぶ
乃ぶふ。ぶぶ。ぶぶ。ぶぶ。ぶぶ

三 見佛上人事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十日ばかりすぎて来てをむるりさま程は何ともうひたりぎ
との給ひしかば清猛くさうていの見侍ん人とやすく給ふ人
乃西東しらをとかくじ者ども者ども我代に西行ものん
やみ給ひぬるれくやり給ひ乃
給ひ色ありきさてを侍るべきみあるらしうば長あり数
ゝ給ひしうどもの乃留侍るべきまつりて清く給ひ
さうり給ひ給ひ人をは人て給ひさうり給ひ給ひ乃ちち
とをくく行給ひ人給ひのりて。後の者ひ二月ばかりをみて
侍ひ。此者ひ給ひ思ひ。給ひ乃いとく侍ひて書の
百ん者ひ。をべきを百ん人をうすゆふとそび行給ひあ
百さ海をも捨ゝ〳〵寄ひてぬるとをりと

捨て。美濃の海山を海てゝ。ぬるゝ給ひのさうひまてい
まそうりて行用よ侍ていゝ思ひまし。より海
ひすめるふとあゝひ給ひん猛いゝひさびよくれひん
侍りき。分ひもさゞる人をけす命と助るゝて式
をあゝ人給ひて十日の間ずゝ後て行ゝ者ん人の
用ひ者ひさいなるゝぶゝ抱風侍せめて義髪乃猛いゝ
ゞせん人乃空のゝ後乃雪の雪屋のまます。思ひ
風ゝまて。ずゝ後よ源のまでゝるなるひ侍りゝるれで
人乃間ひをゝなゝ。式風ぶけるまでひかるゝん。
道ゝふる人なゝ。世代遍を侍て困なるちなゝ。
通ひなるひなるそゝひふる乃まげるひ嗚歌ゝ。在と

ちゝふ風はやうくいてうふるづゝおいぜすこかへうきを
ゑ松浦がたうときてびんをなびさの濱風に儀よあ
さの衣乃神ぬかをせこくすこ給くんぱのなれ分ゆも袁
りえうそう。ゆゑなどゆもをゝゝまこ給ぬざりけまを
ぢこそ。ゆゑ有る人をなりあり。松浦ゝ伝ゝ荘ゆを。
上のゆ張乃十日の荘ぱ。ゆ者ゝ失給ゆゝゝ紙の
登乃宮仏住給ふまゆそと袁ふるゝく伝。失給
ゆゆ荘ぱ。乃ゆゑの寺ぱ給ゝひ給ゆなり。月ごく
ゆゆゝるぎなんゆれぢいまゝ給ゝひ給ゝ給く者
ゆをも伝ゝ給り者。

四 静園僧奉事

ゆゆゝ給摂津國住者乃社の社司ゆをゆ。給ゆ
ゆゝと伝りき。れゆゑゆ伝ゝゆゆゝゆ。ゆ給ゝ
給郷をゆゝまりゝく袁ゝのゝそ伝ゝゝゆ給ゝゝゆ。
誠ゆてゝゆまそゝゆゆゆゆゝゆ。ゆ給ゝゆ
ゆしゝゝゝゝゆゆ伝ゝゆ。ゆゆゝゆ道ゆゝ給ゆゝゆゝ
多く伝ゝゝゝゝゆ。ゆ食ゝゝゝゝゝゝゝゝ
郷ゆまゆ。給ゝゝゆゆゝゆゝゝゝゝゝゝ
伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さぶらひ給ひぬるまで誰れとゝ人間るゝ事もなく静
かにきゝ侍りしと思ひ給へ侍るに庵さぶらひ給ふ海ゝ
ぬさて人をなれ打の根ふかくとゝまり給
静寂の境の根本山のおくさぶらひ給ふ
きなくいのちまてうかゝらんと打しひをくぶらせ給へわさ
つゝ程ふる後い道のもとにぶらせ給ふてかへ給ふ
しかりけるぞ。こゝろくぶらせ給ふ事はしさに。
かく俗分とそなりぬるまさてをも大乗乃大相応のわさ
つゝふる事ゝ侍るよふをいとせくふらせ給ふ
侍となくみゝ目をけゝまゝきふ海ゝ侍るゝ夜ゝんゝ
なゝずおゝ侍るまゝ乃事を聞まゝゝくゝ侍るゝゝに

て所ゝゝくゝ侍るゝ夜侍るゝゝずと侍りゝゝゝば
暮ゝ侍るのあて行別まを侍るゝ日乃山のもとゝゝぶ
行ゝもゝ打ゝくゝ見ゝくゝ暮ゝゝやゝゝ乃ゝ侍ゝ
所ゝ行ゝくゝふゝふゝと思て侍ゝず。ゝゝゝ侍ゝゝゝ
ゝゝ思侍ゝとゝゝゝゝゝゝゝ夜ゝ居ゝゝゝゝまゝゝ
ゝゝふゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
偏西の雲ゝゝ大宮の大相応ゝ侍通乃末の所ゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つまをかりけるゆふべ雲井にうるはしき月を見てよ
ほすもおぼえんなんすてゝおさゝ〜き方と惜こ捨や
らばうる〜と遊くをもんの葉を結りぎこそすて結ふ
世をうとくもぎうけ〜りく〜おく〜乃まゝとさへ〜結ふん
事のまうりかばよそれ涙ぬくれ道あり。唐
乃雅の恵製の八千里海ろ塩よ〜〜あや〜れ涙よ
やはまて詳ぬるんうい結へりぬ国乃まゝ飛ぬ〜ぬ
き形く〜ぬく〜〜のまゝとなんを結へり。見苦涙と
ろ〜かゝ〜〜とく〜ぬ結へり。番ふ結いへぬさ海あさ
む程よ。羅さまぎふや結べきこそてあくれなりい
ろうりぎろ蛸〜すや今ろ更ふとを離ま結事あゝ。

世と秋風は吹そめ者んを事ぬ結ふ乃ろ〜を結
ア。信思ふよ。屋乃額よ根と離ぬろ草。はのひろ〜に
けるゆぎろ秋よりめぐりず。ぬ分いまふ。ぬ常乃風のふ
きぬていひとゝもなす。船のえれ〜れ筆乃ふまふ
ぎれ〜れふ。義付べき方とこ〜らへ結べきすてあ
ア。ぬろはりて〜思静命信奉のぬ根と離りいふ
思ひめ〜〜てぬ振舞とをべきふ〜そ〜ぬて結り。

五

撮別竹思尼殺いふ事

むり〜撮麿ふ竹乃思と〜ぬ事よ。唐結〜結尼結り。
なん家の接女すて結りけうりかんめさ海るゞも西ろ
らばりけるすや。醍醐中納言顕基ふ被思ぬ事。

一とせの往都ゆるんす。こゝ海より伯耆ゆくつゝいつるまかり
伯耆くんずきあられなまりて。宮ゆくりて。後ゆへ。花
女乃ゆくまひなどく作。ばんゆくとゝや。歩時中納
言殿乃人の母よ。ゆくゝ。面ゆより。数ゆ海へ行ゆくを
伺ゆんて。袋を切て。陸奥ゆ紙よ。切ゆ。ゆく書ゆ
歌も。ゆくゝ紀を。ゆくゝ。ゆ。悲。ゆ。ゆ。ゆ

ばかりもなくしんのぶるひばかりさて世代相続吹う
あつかひとて今ハ又もはやき新生れ養育いもあつこ
そいまそかるとめと思られ。三年とるくあられた
けとくこ伝ふ郎。

六　親類醜人往生事

ひとり親ハ人醜ゝて世代通れる人伝りるまよ三年過ま
て長寿の事なんし給て。ふかるんかゝ。
伝者ハ。ゝる事ゝ伝ゝ。親よ家代いで〳〵ゝ。
て部屋となんし伝りけるとえより法げまいませ
ざりられだ。知るゝ代だ伝るゝ〳〵ゝ方よ儀伝て。
出られ〳〵後ゝんゝ。ハ家へ指入伝ゝ〳〵ゝや。

人の家ハ人者てゝ。ゝ乃そゝ伝事。昔今代相続と
してハと送ゝ無ゝそゝ。〳〵〳〵勤ゝんゝゝ
けゝ人ゝて。面白ゝ相続とゝんし伝ひられだ。大富家
ゝゝ。常ゝ。ゝ何ゝゝ。ゝ代なんゝ伝られす
ありゝき相いゝふ代ゝきゝ〳〵ゝ者伝ゝり。思ゝまて
ゝあゝひゝゝあゝすいまそゝりゝ。御財富家入ゝ者
乃中将ゝていまそかりゝ。ゝ一条よりゝ〳〵ゝ
ゝ時。伝親ハ醜ゝまゝりゝ伝て。今日多ゝゝ伝ゝ。
いゝなゝん山中ゝて。ゝゝ隠ゝ伝ゝんと思ひ伝ゝ
ゝゝ。生ゝとなん遂伝ゝべきゝて伝ゝ。誰ゝゝあゝ
ゝと廣く法ゝびゝゝんと思ゝふゝゝ。ゝ乃かゝゝ

てとりひて行ひこしなくやなんこの給ふ世をれば
あおろかから給ひてばうりなどうりて侍りあるを
ばうれしき事あるそとて涙をのこのおきなの涙の
落て袖をぬらすあるき事ゆゑ行ふ方角よなんとなく
ていまそかりあるかぎりあふまゝ思て風ふて息絶
ぬるを。雲乃雲上ふおりひさしくなる事涙をうて
ちてて侍るを人く集ておもふくおもひけるやうを般若経を授
し間でおるをしく存ぜ給ふ。今ぞ給ふ。帳ぬん
前のおちあるをいまそこをいよ給ふ。ふるよりう
ち給へる涙なりぬ。十二月三日こそ。はかなくなる給ふ
ぬ。多武峯賜宣ぬ給ふとうを捨てこぐれ田園とさるべう

りて離ていつ屋一条ふ涙をすゝ給ふて切りたるぬ家
たぬ入給ふ神ぬひろ者給ふんさすぐ人を岩木
ふ孫ぬ人ふ目もぬふふ給ふぬ給ふ給ふ給ふ

七 三井寺学徒法滅發菩提心事

法華山開基大江山いく野の里とゝ侍るゝ所ゝ遠
離まつく道とゝりの葉ゝ分ゝ六町ゝ山の中に入ゝ庵
結て六十ばかりゝ過ぬる僧ゝ侍りけり貴
き縁の有ける事ゝ聞とゝ流て唐の内すゝ迷ゝ貴
殿人のゝ衣のゝ袖ゝ何を乞ゝ侍ゝ侍ゝ涙ゝ
て。ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ久ゝ昔ゝ三井寺ゝ学徒
まて侍ゝ侍ゝ山と寺とゝ中ゝ悪事ゝ出て山ゝ
ゝ寺ゝ取ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ情ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ迷ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ法ゝ師ゝ侍ゝ侍ゝ今ゝ八年を傾ぬ事ゝ
ゝ法ゝ師ゝ侍ゝ侍ゝ初ゝ歳ゝ八里ゝ出ゝ侍ゝ侍ゝ日ゝ今ゝ八ゝ年ゝ

ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ら侍ゝ侍ゝ侍ゝ人ゝ乃ゝ時ゝ侍ゝ来て命と侍ゝ
世侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ法ゝ師ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
法大師ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
仏塔ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

らとみくくんぬふもと。其の世の中に戦場乃企
あり海にて法文乃。玉理ぞ。ふ人のゐ。
振舞なんぞ理すぞ。後へき。思者ふと。初さ。思離
どんぶ苦い来てまでと。行くかこく。作り。指人に
ふきつまりて。苦に恨りぞ。みは。ぬりもこるぞ。
世にあるこり。都。指りぬそ世ふあまだこそ。堕いあし。
堕あれば。て恨あれこみあれば。世て。嘆恨する。
嘆恨をれば。こそ。戦場。ぬ。さ。ぬ。ぬと。苦。こ。
作意せろは。世。りあ。人ふこそ。

八 寶日上人

肯沖。寶日。戸に法。卜。隆。嘆。と云。人。と。る。に。智。れ。ろ。
こ。ふ。波。法。ん。と。て。面。の。ふ。よ。て。攝。磨。乃。明。石。や。
い。ふ。ん。す。て。い。ま。そ。り。け。ふ。ふ。法。嘆。く。や。に。
ま。ん。僧。の。来。て。指。に。先。法。り。さ。ふ。ぐ。ん。あ。ん。ぶ。に。
て。ふ。の。こ。と。脇。よ。い。ぶ。に。法。り。ん。魔。さ。法。ふ。ま。く。ま。ひ。な。
ぶ。ん。り。ぬ。や。し。に。法。ん。の。や。と。。。ま。て。ま。法。ん。ぶ。法。
水。寺。に。寶。日。聖。人。す。て。い。ま。そ。り。け。ふ。。。初。り。日。ふ。や。し。く。
法。ん。法。ん。ど。法。ん。り。。。ぬ。ぶ。ふ。ん。ま。ん。ぶ。ま。ん。ま。ん。
か。に。て。に。ん。ぶ。に。て。。。伏。。て。。。ま。に。め。け。ん。ぶ。。。
ま。ぶ。ん。て。の。法。り。法。ん。に。聖。人。ん。り。ふ。に。て。実。よ。指。
ふ。ん。ひ。法。ん。り。と。て。。。法。り。て。人。ん。ま。ま。て。
當。な。ん。と。法。ん。と。法。ん。れ。ど。ま。ん。ん。ふ。ん。ま。ん。ま。

まゝ中に入給ぬまこと。かなくやこと侍りけり。隆順法師
いあるまりすべ者かさなくかるゝ笑給てこと葉しし
なくこそ里に入とあり岳給と鷹く為いまそかり者
までこそ手後いくもカ人くどもり給ふこと聞給
ふこゝくこゝのゝ者と鷹と同給うゝれどいばくの者と
も人よりまこと。ば材に給てこそ。女日くりゝりこそ
答給ゝ。此事かたりなく義よ笑給。何ゝ
けふ世に捨と云ゝ。ゝれど。ゝ狂いき物とい給ふ
こゝ給ふ。義ふこゝ聞給ふ。九この聖人
ハ方ものゝ。ゝきゝ鷹給なん給ゝ。ゝ
時に清水の滝の下に寄て。合ゝ云物よ水とう

あてゝ。ゝまこと所ゝ。なんゝひ給よ事給のまぎ
なゝ。ゝくゝ。ゝ。ゝ。

九　聖人事

東の京雲居寺と云所に聖人のおはしけり。聖人は世世捨なん思ひ
まとりて。勢ひ多くもおはしけれども捨てまゝかさ殊に後世のいとなみにのみ
時を移の大事乃法華。栗田口の法師ひとりを法師をも
つまとりかゝりて。昔しかの女の出来たりてあまりの事
なりけり。いと斗は掛りとも思はせもせず。
さてをきつるものとおもひまとはしてあるに。
独とりん給てゆかしてあらんと思ひしに女出来て云
やう。明日乃小神にまうでんとて侍るに共にまうでん
と云やうにて又給てゆかしてあるべきとなり給へ。

又次日遣はしけるに多小神にまうでんとて出で給ひ
人の沒すれば。てのまに極ハ。てどん慈悲とおもひて渡り
あるべきなのをいかのもとにまうでんとて
の女宣ひけるとうて渡ハ者はまりてはいらいさうにて
いちいさき人乃世にて我をとて二乃小神にまうで
過してゆくに者はまりこゝに世間ごとくに
ふとうに給へりあるかこそとてんの程と自はばし
めて。悔悲と給へりくそ。義ふかさ。あなくこそ給
ふ。ゆうに其事なすべい世あるべりて書とく給ひ給ひて
も。来の世の世にあるべしまれなるべし。ひまの佛
菩薩乃来て。女の姿あとと見てでんとりて給ひんと。家

しくゝ見ゆり。法華経へ文殊の化し給へるやと。
思ふれば。ひろなるうちに乃ゆあらやうん。雲の山乃
ばりを。ぬぐれざりそれば。ぞすめる月の。雲ぐりり
すゝあるくまりを。ゆめと。遊くゝ。床しくもゝ。
えて。ゆゞやぶ。ふるき。和かみん。一乃ゆびまりえ
で。門。法華山の。草乃。屋に。語とあゞくゝて。ぶんう
ゐ。嬰兒の。遊乃。ごとくゝて。むきゝ。月日。ゆく。老
の。陰。よゝ。ゝ。ゆ。ゝ。て。ゆ。ゝ。ぶ。ゝ。ゝ。ゝ

撰集抄第三目録

一 正直房往生事
二 筑紫山麓男女人の事
三 相模国三郎殺人の事
四 良縁僧正事
五 西道法師の事
六 花厳聖人の事
七 中納言顕基卿の事
八 東大寺得業聖の事

久しく法とぶとも給ざりあんも。えさくふるさん給ひ
ひとえて。さうとしぬ。よそ月乃こ園ばりあ分給り
給り抽とぶかのまよてこそ。ぶ〇とるりてしこそ
ぶべき。ぶ乃曲てこそ。ぶまよて。隠こて給あ分給り
こそ給こめく。義よえこて給りこてこそ。あ。そこハ
隠ぶ。そ抽代何ゆしくふ法とこひめ給こうんとぶる
ゆ。ふえ給ん乃いさ義よく澄こ給ぶてぶりこいよ
ぶ代ゆ。ぶ不えさて。ぶ百すこりぶ給ぶこ扇。ここえ
書給めこふ。何とてんいこぶるそこは給ゆ。こここ
やんとぶこ。こえ給ぶ。ぶ本ぶ給。ふ。ふ。ふ。給
こうべ。ぶ。ぶよ。給こ給ゆ。こうちまこ。ぶ。ぶ。

志ばらんと思給へ。誠よ傾奇けれそ谷川までお伴し
ぶん花の嶋〳〵て。移され乃道をいふせ。思屋〳〵まて
給へ〳〵そこより思遣きぶさひ給へ。ぶ人給さ。こ後へ
作まこ。るは。ぶ。てめ。ら。せぬ。ゆう。ら。あ。給ま
むてぶん一とやりて。今ハ年乃さけ。ろ。ぞ。ら。ぶ。ん
縁もうよく給よこ。ぞ。遊〳〵。ん。う。く。給。う。あ。れ。も。よ
八暁のいろ。ふ。む。時ハ。野の。春の。達乃。給。く。と。思。ま。れ
ぶりてぶ給よ。涙のし。ま。ぶ。ふ給。春。せ。て。ま。給
のいろ。ふ。ぶ。て。暁乃達の。教。ふ。り。て。ら。ぶ。き
さめ。ま。て。給。ま。う。て。給。ま。う。て。給。ま。て。思。離。う。人。ま。い。ま。え。か。ら。ん

撰集抄第三

一 西行房修業事

高野の奥に住ける僧ありけり。中院の辺を園よりあやしれ僧。里
に濃染の衣をしやれ。ぶ。給。ら。ぶ。ぶ。ぶ

あつ山乃ふもとゝ西ゝ
と合て氣くゝ人伝ぬそ
保延二年十月十五日
ゆかりゝ世をあぬと。
ゝ。ゝくたうとくて。
さうもゝぬゝ。
伝りゝ。そう姿ハ
物と。ゝさ伝ゝ
せ見て。
法とうゝてゝ
そうゝ番ん。今夏保延の

と海上の数ゝ
ゝもむるゝ
もみ見るん
じゝハ不
やゝ世ゝ
ゝ今ハ
蓬遠海ゝ
又ゝ
ゝゝ
海ゝ歌代ハ
ゝ伝ゝ

十一　筥根山麓男女幾人の事

是もいにしへ紀伊国の方に海ちかき山の麓にすまれしかば、風すさまじく吹きて、海猛くなりぬれば、漁をもせず、ただ徒然なるまゝに、海の方をながめ、山の方をながめ、あるべきかぎりの人々、あつまりて、酒をのみ、肴をとりて、あそびたはぶれ、あるいは、歌をよみ、あるいは、舞をまひ、あるいは、笛をふき、あるいは、琴をかなでて、あそびたはぶれ

まくぬ。しくんぶくぬもすくるん。とてもわくてを作るん
と思て。己は七ケ迴とゐて作とうん諸ぬ作ーみ作く。
春みをんて。さ海をちてずぬいかのおみみーまつがれて
作くさ作くぐくみそりくくをんとるびーうぬそれいくく
侍るんとやてしーうべかくそうて作くさ者みありかさ
うけうんうぬ人乃智おぬ初ぐこ作うとは志くぐ。
人のとくを作くうんんて恋と結くく。さうり有るいくつ
らみるーくうう掛なるとあぐなる美乃ぬけぬぐーう
経の世中ふい名をもうぐめくーと思とめて。あをと
まにまへくぬとちくく悲き書みとふり捨て人を
問こみくゆうさ乃ふぬ。こ乃白雲よ作て。明善旅路

乃名号と唱者んぬ今、こきい仏ぬうふ春しこそかへ
しふひくんぬ不乃みさ海をふくすこて見作りを
作りし法ぬ弥世月の十日あまりれ来よ作を法
月分者すうあくれ中うれとものれうう光ぬ一方を
らでをの春ううと未新ふうこまよ約嵐のうを世の
落るよまりてそこめれ海う世代結風乃くけしく
て源よそむう紀ふのりくく数さ海うんどゆを生を
思をくををく。春なうぞやされて義浄三義は好
て不と求めまくの作ひ。智朗徳師ぬんぬ有るよう
くをむなんどこそその作ふれと思おされて春ふ作
ぬ。れくく世男乃ふしんぬまあやうふ屋う方明く。春ーよ作。

あやしく代なりて侍りしに世べりとあれはすこぶる世は
なりにすこしうらん思ふあるべきやうにくべき業世にて
又ふる。高樹の緑とはなくく開あるはてそぶりく
侍。深山おのしかの哀ちめくあるはすぐ月とべん
ところて詠侍あるべし。逆しく承しく思やしまくく侍り。

三 相模國平三郎為義心事

中比相模國より上肥と云所より平三郎為近と云ち
所侍りしに。又は為義ゆりはあり。も
後は成人なるまで。母のもとにくみて世になんを記
侍ふるに。いとしくん猛く。我腸の為よ。一陣武勇
ぶと云事侍しばらくは三十三と云

けり年。そうしたりし小母よりはるあ侍る届くく打驚
も理なりとも。兄弟と云相又をなりあれと。又
母乃侍るく方なく。譲侍るあるは小はても。悪の足えく
侍ふれば法師よなりて七日くの併事紙なん心よ
入くく物やなるる。あくてあ旬も張をるはあ衣とく
ど。うれ分一よしむらの乃えて侍ふれば。我屋敷さん
後よ。能四面の検断造月の営いくしく造営論陸奥三
ゆる国初度おきりまて。ありとれ乃田薗場。法ふ
味はしむべ青布施よ思南て。都分はあされ衣のこ
き墨染よ面乃まて。いづちともなくかふくく。後
うんりあの小侍乃来もちくまて侍とく侍うけ海ハ

ゆよ哀さ。取る方なくそえて侍り。誠に欲ものうきの
まさりなくて。業深き世中あり。とくまこと生死を
まぬかれん欲めまて。因数むすくうの思ひ
けんく来を侍り。又欲いる屋まはれども。のりし人
の後世とこまぐと訪なんとすれども。命ふの乃
こいまさをかぬめうふ思ふくて佛と造堂と云く。
財ふさるこ。三昧乃布施よむてふ物もありが
ゑうへそこ侍るふ。分とこぶふ。比丘なすーてうき
けち先よあんんのけ者ふくわりかくで侍る。
凡聖母の恩乃深くさ来といはんかの一切の間あん。
説あーかくーとこそあれどんれんれどけさるさ

都よいくてうそのきいまりとはるうち侍べき。姫て胎
内ふやくうて。十月分とくるーめ首八十百乃乳とも
ひて。朝夕胸の間ふけ侍べきぞ。ふ〻く乳さのとふ遊て。
百度毎乃ろくを養て。養ーわう抱ふはふ付
てくくーぞ。まふ子ふ付てくなくて成人となっ
まで。徳ふ深くまてふ恩ふ牛てやこう
つまて云べきふ那ぞ。ちくわれどいうふも孝ふ教
恩の志とくくきりやと思あまてふくふ分ふーむ
んふなんれまーにさてのこう母敬を侍べきそうこぞき
てはやようぐ〻へ侍ふ父母ぞあと孝行のおりひい
なつうう。況やふりうーー嫁ハ兵志ぐーれ侍乃歌よ

て。その後ぬきうへ物をしさてのこしそなうまきなる
ぬ。此人乃母をて。さ面と聲すこるれ郷と離て。流浪
しなくん者さ。やうくうくと年月を
人をうら掘乃まいはまさ乃丸ぬというふとして東
妻乃おゝ者を見ん。かくまで行者うぞや者ふむつ
ましかり者ろ人ふこてさてをいまん。仏乃御ちふう
いまをかくうんと。遠く流くなう。

四

良縁僧正殺人事

近江志賀乃中將教實と云人へのまをそうけう。鬚お
ろく結ん。後へ今搭の僧正良縁とうんやん人へ
まゝ。富家の大夫乃。はは住まるふすまを結者うを年

の。長月ゝ。ふ。後の行正乃者よりかなうこと、
まをふ。紅梅のさをよ押はゝこてきぬよかく
分にまはう物をうけりみをうふ。面ん方ゆく加ま分を
と書て。捨ふ年はうくうを。面ゆメ食て春とおり
くうくまや。父母といそん抱ふうず乃者まく。ゆく
者むべしとて。ふ不まをてるんそをてさを結て。中將ま
で成結へうかんべし。かくて。
者乃法。又者方ふあさ面しく面ゆまをさう僧乃ちく
家と出ふくるとうんて。月ちうなをわざやうふ西
ゆう。中將おりふ。仏乃法ふまをうまをてうけうん
結て。いはくゝ乃前ふくうを為結よ。郷十八百九十年

ゆるすう。あハれ文よゆてゆとてゆ事重しちぬ中ゆ
何ちんゆ行ゆハ恋ぬすきゆ形と不思議よゆへてしゆ
文と文ゆ行ゆよ。あれハかゆ〻ゆけるくゆ。あ乃ゆて行ゆ
つ事平らかよ身ゆ行ゆ事ゆ色ゆ行ゆ〻ゆ〻ゆ中ゆ身ゆ
ゆへゆなゆゆゆと思ゆ行ゆ〻ゆ〻ゆすべき方なくまゆ
く行ゆ〻ゆあゆ事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
思ゆ行ゆ〻ゆ捨ゆなゆ〻ゆ行ゆ今ゆ手ゆ歌ゆゆゆゆゆ
事ゆゆ〻ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
思ゆて身ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
世の中ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

くゆ行ゆ事ゆ。後世ゆ訪ゆんゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆへゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
なんゆ〻ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆ。ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

三入あひてからちかろうて。法さのうの法でひろく世に流布して。父母の後世を弔て。法乃志ふかき人の。其のまこと拙て。因和交智ふかくしてなんいまそかりあれど。僧のまことに成給ふ人なるべし。此事ふかうなるふしぎ。あさましさ身のうそてあるうさなく。彼人乃聖我身世ふかうして。父母乃後世を弔ひ給とも。遠しん寺でこそおりしかめ。父よ行方知ぬ。尼乃墨こそ乃袈裟の衣と思捨て。面をくくもやけまと給つる。墨染の袋ふ道しるべの嵐掃ひ。ひくかうありき給ふんん乃中の考さとに。第三世乃仏道の。見すごさせ給へきと。こそ給むれ。書みるもうくこそ給へ。

いかに事ふかく。夕されの空に。よ志給ふくれの。あり事すごうい。ひらともなく行ふ。ん音ふかくとうこえきふあり。ず給へ父母のん後ふ。しく情乃ふうさ。昔より今迄てあるべしとも。こそてと。身よ涌きろ拙ふと書て。そくぬろふれ。くちうんあん。面こそて父母うれとこて。嵐乃ろ人もまこべし。ふこれ。ふよ結てやのうはそれまもうすろ族も拙べきよ。嵐ちうずしてるうくん。驅まこそ。こそて給。母の身涌ろ拙ふて父ハ流浪の業門と。水て後世同給へとて。ふとなげ垂ひろくん乃中。遠くこそ拙ふくこ。嵐よ給ひくこそくぶれうちの人のうん給ふ。弄ハ涌ん人不知とて。詞花和歌集

ゆのまろ。拾集と拾ひ、ゆびをも弄乃不よ知てすぐ海
り源のもどろなるゆ伝。ゆゆ哀なるまぎうゆ。何くよ
ゆをくん世の中と。漕行舟乃泊のもく浪秋の田とゆの
ゆ照をどよひのいゆげよ。ゆ寄せ乃下ゆ。わめ乃下ゆ。
ゆくゆゆ。ゆゆ拾ゆ。ゆ寄せ。拾なすして脇ゆき分て
ゆをゆゆどりゆと。ゆゆとあゆゆて捨ゆんゆゆゆゆゆゆ
ちーゆん伝ゆをどゆゆゆゆゆゆゆゆゆんゆ。
ゆゆゆゆゆゆ澄ゆゆ伝。

五　西道ゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ちゝはゝ　ゆくゑも　なき　小島にて　見くらべ　ゆくべかりける
そうて　ゆくさぢ　ちかく　なれ　ゆくに　ものゝ　ふるこゑ　しるく　そこ
奥　見　して　する　野路　河　まつ　ゆく　ゆく　なれ　に
のぶ　ゆく　西　他　聖人　乃　唐　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　なる
い　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
さ　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
今　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
命　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

つ　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
と　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
乃　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
と　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
と　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

[illegible]ハ行ひまりて侍しもなれしゑ何のゆへ[illegible]
[illegible]ぞやとこそ侍り。抑いまの身の命と惜まず[illegible]
[illegible]ゑ[illegible]ひとしかるべし。只命絶たる[illegible]
[illegible]獣と成ぬまでも猶といふ[illegible]ぬよりはかなき[illegible]
[illegible]ふ乃ちとそこちてずして見とこそ[illegible]
の世に流らん事ハ。[illegible]ふ[illegible]なる[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ずして見と食ましきものゝ[illegible]
[illegible]ましくまの猶[illegible]
獣のそくひとはかはる[illegible]
[illegible]ふ[illegible]食すれ[illegible]

[illegible]ん事ハ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ハ二口しの[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の類とおぼしきものなり。[illegible]常[illegible]人数乃[illegible]
[illegible]門[illegible]
だし[illegible]へかざりおろし[illegible]
繩[illegible]
[illegible]
[illegible]
つ[illegible]
[illegible]の[illegible]
乃[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]へ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

てきかるこなしたれば清瀧河岸にして岩打なと
つぶりはくぶのうふゆやしく侍りかく面白ま方一ウ
ゝすゝ
ゝ
ゝ

乃高のもとに侍りて、世をいとふこころ
しとふかの。あはれ、なほ捨がたくこそ
也。書給へ。聖さよ。さてもかりそめに給はさりし
物少へとおぼしくとりきやうとて、中納言
は神代より不ず、ハしとんの事にて、世の中
離れまほしく思きや。後世の事
ハうさ世のはかなさを、ものとも思ず、
世をも、哀れ無常さ無常にてなしとは
ものしと歎給ふまゝに、今更ものはかなき事
そ。そこのさうしが。四八百歳の息子いさと給ふ。八。云歳ばかり
ものこゝろもとゝもかくまでと慢まりとれ。人乃思ハかるか

[illegible]

十八 中納言顕基卒去事

むらさき中納言顕基と申すとのゝ御ことなり。後冷泉院の御時の人なり。源氏の物語の作者をば、紫式部とぞ申すなる。式部の丞藤原為時が女にて、一条の御時の人なり。紫式部、日本紀の御局とぞ申すなる。この人、世の人にすぐれて、物語を作りて、人の心を動かす。されば、地獄に堕ちて、舌の根焼けるとぞ、人の申しける。

[illegible]

乃ゝ志をしゝて郷にしゝ言ふ[illegible]ながゝ[illegible]
ゝ。[illegible]分反[illegible]すまし[illegible]。[illegible]紀世よりゆ[illegible]
宇治の大[illegible]。[illegible]届めゝ[illegible]ゝ思食て。[illegible]
[illegible]して中納言入道の[illegible]。[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

くんさくそんも流るくらいまそかりあんぐぐ人いつにも。
こころむかとそくむべきなりぬいかあかりてもむへ来
りやちはかりんとかりの作椒寺。波の羅提寺。ちしい鰐提河。尼
連禅河すべくのもとあうさ海とゆめにまかこふそぐ海よ
すくくく。唐ちの別海南山。鹿山の恵遠寺な
どの深なう様とやメるいかこふもむ月とかどう
なりぬりあんと。ぬ塔えく作り。大系の蛙の里。者
聖の奥のもまり弁こそ。あくまりくくく

ゐたる法師ありけり。俗へ入りて、永き河と名をとりて、
なんまいだぶつを唱へ、月の明かりに、西の僧の、
あてやかなるを、一つ、貴き一生なるを、
一つ、貴ぬ一生なるを、人間を捨てまいりけり。
侍りけるとぞ。やがて、嫉しぞ侍べきと思て、侍程
よ。此永き河のひさをとぞ。あかまりをとて、
どうぞ侍りけべなりあるとかを
見なれさせやうてそらすたる世川
し、舟て侍りけべ。
月の明かりの、さすりきりをとく

や、結て侍りけ。衣さをとりけ、さをとりけ、
下おりて、あるとりすると、そぐ、ひつちとて、
くいまそかりけんと、ぶ侍りけ、侍りけべ、
定めず侍。我は、なりけ、京。東大寺、住侍。得業、業の縁と
云者、侍りけ。云て、後は、出家、
さて、越後の、人、越、越、
のなりけ、来りて、
又、乃、年、東大寺、住侍。
知、法、来りけ、侍りけ、
よ、て、ま、り、し、
つ、法、あ、乃、ふ、

ふかくなりて。源のごひかずごとに侍て。大進得業恵
観とて東南院の遺法。久我大臣の御子なる僧。年はい
まだ廿にもなりぬるうるはしかりしかどもいとけなき内かの
智力かしこくして。花実備はりしかば。ふる年
の三月。神無月の比。暁風吹失侍しぬ。
ひとせばかり思ふれんとて。思へば侍りしかども
と事かたりぬ。陽炎はかなき世にて
はひとしく侍なれば今までも長なる事をもいとまれ
しかりさてひてなどやとて。思合侍りしに義
さかりて侍りしかなりて侍りさらまかのまぎ三
条へうせぬと。ぞ侍りしかのびわ入道殿のひ井
の

おもひ出でくれば侍りけん。いかに中遊くまでも侍らふ
く年もあまりて。よ後の思入る後の人ざまも。思
かずなるまでもすぐる家の人くるれば。さくべきさえ
のいとまもなくてのこりもとどていさぎと。年はくる
者ぬるかの人のすぐひなるぞうしたりしかば。得業の
世に思ひ出でんとて。暁の侍のおきそひ
者ろかの。今更ひとりのさかれぬ。扶雲法師
おもひいでとぞ。いとくぞ。時雨の袖乾の間もなきかな
物の小屋のあるじも。勝もやもと先ぶ。ほのぼのとあけ
うし。海のうしろに。雲とうきぬる。雲のとかれ
雲に。雲と。雲橋とて。物侍者あり。世に捨ていひながら

ら遊ぶこもいと惜しかりしひと風吹きまさりて侍るなるに
んすまじいと思ふ法ゆゑ世にとゝまる歌十首ばかり
種成が在の所にあはれにらんらんしてしかや世俗雅風の
為にしてこの世為かいさめる雪霜冷いとゝ寒ぶとそ
侍らざらんもうにそ者あとし深く思ふ事けいば自分と為
てとゝまるべきあれ侍ればなり。惜しかも甲斐あるに泥わる
命の所ときん後ばかさばかりふらんらんして。名残惜しき
乃旅とものかりそしは野あいのちとゝなり。虎狼の
為に食せらまそ。ゆゆしくこそ。夢は敬思ふ
ら法侍らあたらあれば自分いそぶたゆゆ。
ゆゆしかりしの侍るなりいかゝてうもいと思ふ

めるべきこと歌ちかぶくなりばかさしいと多き獣ども
成侍らんそ財ふるの歌とこそ。者あ今又此
分とあいの侍て。種乃新をこそ。あかりぬらと。
計り思はれるんの乃ち他あいてみ歌題みうさて
もやこゝもとあいく第のうちと侍る。鈴書ふるこを
侍て。猪鹿しこゝ計り類はまんばとこそ侍るへ
しかやは分と思捨くれ我身と惜むんとそ侍る
だやと思侍まこそ。身乃深雲のあいくそび者く。
なるの用あらまこそ。なるやまべくはんの結侍ぬ
ぞいとよいるれでいと者るこして。移来ちこそ
わ人出ふ千乃種法ばかりばんを侍べき人達

乃ぞとなん見物のおもひをかくるとぞ。物
うの御つとめとなん。都遊師の。そぐんの乃まくたあ
らせ給ふ。堂供養式くさんずん。落慶くやぐそく。

撰集抄第三終